

波斯匿王女金剛形醜念佛力を以て殊勝に改る

舍衛國波斯匿王の大夫人をマリと名く。一の女ありハシヤラと名く。其面貌醜にして肌膚粗澁なること駝皮の如く髪は馬毛の如くなれば王はこの女の醜惡を見ることを好まず。宮内に勅して一室に入れて守護して出ださず、すべての外の人に見るを得ざらしめたりき。女は年益々長じて嫁せんと欲す。王は吏臣に命じて曰く、汝豪姓の貧者を推し求めてこゝに誘ひ來れよと。臣は命を承けて探り求めて一の貧窮なる豪姓の士を得たれば連れて王の所に至る。王は窈かに説き玉ふ、汝を招きしは他に非ず、我に一の女あり面狀醜惡なり、若し是を納れて妻とせば財寶を供給すべし。能くこれを納むるやと。長子長跪して曰く、欽しみ王の勅を蒙りて背き奉らずと。王は女を以て彼の貧に妻あはす。爲に宮宅門閣七重を起して是に與ふ、王は女の夫に勅して自ら戸を排きて若し出づる時は汝自ら閉ぢよ。他の人に女の面狀を見する勿れと、

王は女の夫の爲に財産を供給して乏しきなからしめ又拜して大臣の列に入る。其人の財豊かなる諸の豪姓と等しければ共に宴會をなして毎月に更爲す。會同の時には何れも妻を携へて來會す。然るに彼の大臣のみは獨り往くこと數年衆人疑つて彼人の婦は若し容貌美なるか又は醜惡なるかを知らず、或は醜惡の故に連れ來たらざりしならんと、密かに共に相語り切りに酒を勸めて酔はしめて門扉を解きて其門戸を開かんとした。

時に彼の女は獨り憂惱して自から身を責めて、我何の罪咎ありてか斯く夫の爲に憎まれ幽閉せられて衆人と共に語ること能はざるや、又自から念じて語る、聞くならく佛は世間の衆生の爲に利益を施して苦厄を度ひ給ふと、便ち至心に懇禱して遙かに世尊の在ます方に向ひて禮し奉り、唯願はくば世尊よ我愚蒙を啓み我前に下りて我に教を垂れ給へと至誠熱烈に祈り奉る。世尊は遙かに其意を知ろしめし即ち其家に到り、其女の前に於て現出したまふ。女は佛を見奉り心に歡喜を生じて恍惚とする時に彼の

女の醜惡なる相貌は忽ちに化して身體端嚴にして極まりなし。尙佛は是を慰み玉ひて爲に妙法を説き玉ふ時心の内の諸の惡を盡して法眼淨を得たり。

彼の五人の士等は戸を開きて内に入れば容貌美なる端正双びなき婦獨り正しく坐するを見て、斯くの如き美人何故に連れ來らざりしにやとあやしむ。彼等は還つて門戸を閉ち鍵を以て本の帶に繋ぎ置きぬ。

其人醒めて會終りて家に至り婦の姿容甚だ美麗端嚴なるを見て喜びに耐へず怪み向ひて曰く汝は何人の女なりや。答へて曰く妾は是れ君の婦なり。夫の曰く汝は先に極めて醜くかりしに今は斯く端嚴なるは何故ぞ。女は具さに上の事を告げたれば夫は王の前に詣でて申さく、大王よ我婦今は佛の神恩を蒙むり、前の醜惡の姿は變じて端正極まりなきに化すと、申し上げければ王は女を連れ來れよと命じければ女と共に宮に入る。王是を見玉ひ不審てこの女宿世何の福ありてか豪富に生れて其面貌醜陋かりし。

佛王に告げ玉はく、過去世にハラナ國に長者あり財富無量全家共に喜びて一の縁覺
聖者に供養しけるに其聖身體醜惡にして形醜くければ彼の長者の一の女子彼の聖を見
て惡心輕慢して罵り毀ること甚だし。其聖者入涅槃の時にその檀越の爲に十人變を現
じ空より下りて其家に至る。長者倍く喜び女は深く前非を悔ひて懺悔して唯願はくば
尊者よ、我罪を恕し玉へと、辟支佛（緣覺）其懺悔を受けぬ。

佛ののたまはくこの時の女とは今の王女にて賢者を毀咨せし爲醜き形を受けしも後
神變を見て自から改悔の故に端正なるを得佛を供養するが故に世々富貴にして今は始
めて端正なるを得たり。

月の上

天の原瞻仰みれば皎々と潔らかに照す月の世界より、化現し來りし哉と計りに想はるゝ奇に麗はしき月上姫の譚を方等部の佛説月上女經より意譯して、讀者の君等に紹介します。

大聖釋尊が一時毘耶離國の大林樹中の草茅寺に在まして、御教化遊ばし給ふ折、其の御教化の隆盛なる事は、實に未曾有にあらせられた。爾時に彼の城に、毘摩羅詰といふ離車がありました。其の家豪富にして、財寶が無量である。其の妻をば無垢女と云ふて、其形貌の端正美容なることは、實に無比である。芳んばしき門閥に生れ窈窕たる家庭に育てられ、其姿容の端正にして娥眉纖月の美なる清婉なる眸の麗はしさ、此世の人とも想はれぬさやけさは、月の中より化して生れしかと思はるゝばかりに、月の上の姫とは號られたり。其女子産れし時にさへ、實に平凡の人とは想はれず、奇

しき光は閨室に輝やき、大地も震ふ計りに、庭内の樹木は時ならぬに花は咲匂ほひ、
天吹く風にさへ、自然の音楽は響き渡り、空より妙なる花の降り下るあり。不思議に
も此女子の生れ出るや。並の子とは異なりて、呱呱の産聲が便ちいと妙なる頤に聞へ
たり。

昔世罪を造らねば、今かく清き身を得たり。悪業深き輩がいかで豪貴に生るべき。
好施調順、不放逸に賢き家を得ぬ。昔迦葉佛の世に乞鉢し來ます御相を、我樓上に拜
みて己が心も清められ、斯る尊き御佛に、供養せんと想へども香華も飲食も献ぐべき
ものなかりしに、胸に響きし空の音、佛は世物を求むなし。一切の衆生を惑みて、遊
化せん爲出でましぬ。汝が献けたく想ひなば、無上道心發せかし。世界の一切の財寶
を、徧ねく供養せんよりは、清き道心發すに如くものなし。此空中の聲を聞き、佛の
妙なる相を瞻みて、清き道心發しにき。我樓上に身を墜とす、空に住して一多羅樹、
十方一切佛を見る。金山王の如くにて、迦葉世尊も亦然り、諸佛の神力の業にて、曼

陀羅の華は手に満ちぬ。我此の華を迦葉佛に散らせば花の蓋となり、拜みし十方諸佛等の妙なる相好身曼陀羅の花の蓋となる。皆迦葉佛と同じ、我空中に語る。願くば無上尊とならん。塵切修行し正覺を獲ざれば誓つて退かじ。天龍八部のものも同じく道心發しにき。我天上の身を捨て、還つて此土に生れ來て、常に賢善の行をなし、すべて福業を勤むなり。我天上に在りし時、釋迦牟尼世尊に供養せし、五慾の爲の今の身にあらず、唯御佛に供養せん。宿世の業報念ほへば、八十九處の生を経て、受けたる福徳は今のこと、賢劫佛に供養せよ。

時に彼の女子は、此の新しき頌を説いて、默然として在られた。此の女子昔世の善根業力の因縁の故に、其身に自然に諸天の妙報が著いて、妙なる光が月よりも勝れて金色に其室内に輝いた。其又母が此光を見てから、月上と名をつけたのである。此月のへひが成長するに隨つて愈々麗はしさを添へ、芳はしさを増し、實に衣を通す身の光ばらの花の唇ひらけば優婆羅花の香氣を放つ。

毘耶離城のあらゆる刹利王公子弟または諸の大臣華族紳士の諸大家家の子等にして
一度其婉なる美容に接したる者、或は其端正にして清雅なりてふ喜ぶべき名聲を聞
きたるもの、念を繋げ想を焦さざるはなく、何れも皆是の思惟をなす、願くば我彼
女を得て婦となさんと。彼の公子童子等は只獨り念を繋ぐるのみでは稱はぬとて、名
々に毘摩羅詰の家に行いて、眞意を通じて名々云ふ。若し此を許せば數多の珍寶象馬
諸々の財物等を贈るほどに我に與へよと。或は又離車に相見して云ふには、若し彼女
を我に與へずば、我當に抑奪すべし。或は脅嚇して曰く、若し我に與へずば、汝家財
を奪ひ汝らを殺害す等と。斯を聞いて毘摩羅詰が大いに恐怖心を生じ、身の毛もさか
だち何より憂愁に勝へずして念ふらく、彼等若し暴力を以て我女を奪ひ取らんとし、
また我が命までも奪はるゝをは何にして免るゝ道やある。煩悶懊惱して氣を失ふ計り
其女月上に向うて、遂に我を忘れて、聲を擧げて泣いた。爾時に彼の月上の姫、父の
かく計りに、憂愁して啼泣するのを見て、父に問ふた。父上よ、今は何なれば斯くは

惱みて啼泣し玉ふぞ、御胸の中を明して玉へよと。父は眼を啼き塞ぎて其女に語られた。汝はまだ世の事情を知らぬ。憂世の海を荒るる激浪に忽ちに己が身の奪ひ去らるゝ怖れあるを知らず。父は汝の身の爲に城内のあらゆる人たちから實に怖ろしき苦しみをうくることよ。名々競うて汝を争ひ取り、而して我命までもまた財寶までも喪失するかと思へばいかでなげかで居られやうぞと。姫は父君の語を聞き、父を慰めて頌をもて父に報ひられた。

たとひ世界に充ちみてる、あらゆる人に悉く、ナラ 天の力あり、手々に刀仗もち來り、力を盡して我を逐ふも、我を奪ふことは能じ、我には世界に超絶せる佛の靈力加はれり、刀も毒も加へえじ、水火もいかなとも爲しえじ、佛は慈悲の極みなり、佛の道心我が心、我に慈悲心充ちみてり、みほとけ我に在ませば、欲の想もついに止み患の炎も消えぬべし、我はすべてを見ることは、父母の如くに想へば、他もまたついには慈化すべし、たとひ海水 ほど、我を降すものはなし。

斯く演べおはりて尙も進みて月上姫は父母に向つて問ひけるは、我慈父よ悲母よ、我が此身の爲に御心を惱まし玉ふこといかにも恐れあり。然れども左な煩らひ玉ふことなかれ。彼の毘耶城内の公子及童子等が我に婚姻を求むとはいかに悦ばしきことこそは還つて我より希求する所である。其故は我は誓つてすべてを自己の配偶者の如くに愛して彼らを無上道に誘引せんと誓なればなり。就いては吾父君よ、今より毘耶城内の四街道に鈴鐸を振りて城内一切の人民に是までの言を聞かして曰く、今より七日間を期して我女月上は定めて外に出で、自ら婚嫁の夫を擇ばんと欲す。一切の心ある男子にして未婚にして娶らんとする者は、各々自から衣服を嚴飾し、また城内の衢道を掃清して、香水香花を散して、寶幢を立て幡蓋を懸けて、自から莊嚴して待ち玉へと。斯の如きの事を父母に作さしめて、而して城内の人民に女の言を徧く廣告す。また城内の人民は此廣告に接して、名々自己の門庭にまた街巷に於て、種々の嚴飾をなして居た。また城内の刹利、大臣、長者等の所有る青年は悉く髪を沐し、身體を澡

浴し、妙香を塗り、名々我劣らじと競争的に衣服瓔珞などの莊嚴を極めて、其家徒共に告げて言く、汝等心意を動かす、若し月上姫が我門に入らざれば、汝ら強力に我を助けて奪取ることにせよと。爾時に月上姫は是月十五白月の時に恭しく八齋戒を受け、其夜は天清く月皓々として天に輝くに、靜かに樓上に在りて、獨り徐々として秩序正しく經行す。佛の神力の故に、其の右の手に忽ちに一の蓮華の自ら出た。黄金の莖には白銀の葉瑠璃の莖に瑪瑙の臺である。其麗はしき光明赫々として、内に一の如來の形像が跣趺して坐し、身は金色にして自然に顯現し玉ふ。威光赫奕として彼の樓内を照し玉ふた。威光赫奕とも三十二相に八十種好の莊嚴、赫き出る旭日の如く、遍ねく月上の家内を照し玉ふた。時に月上は之を瞻仰し奉り、何とも歡喜に勝へず、彼の化如來の形像に頌をもて問ひ上つた。

あな奇しき尊き者よ、アナタは天龍かまた神なるか、願はくば唯我爲にアナタの聖名を知らせ玉へ。アナタは不可思議金色の月輪よりも尙勝れ、または變じて黄色とな

る。忽ち(たちま)にまた紅色(くれなゐ)とす。我(われ)には今(いま)は餘念(よれん)なし。アナタを拜(おが)みて歡喜(くわんぎ)するのみ。アナタは審(いざ)かし何れ(いつ)より來(きた)り玉(たま)ひし。其因(そのもと)を告(つ)げて玉(たま)へよ尊(たふと)き者(もの)よ。爾時(そのとき)にかの化(け)如來(にらい)の形像(ぎやうざう)は清(きよ)き聲(こゑ)をもて告(つ)げたまはく、

我(われ)は天龍(てんりゆう)にもあらず、または阿修羅(あしゅら)や神(かみ)に非(あ)らず、師子釋種(ししやくしゆ)の世尊(せそん)、今我(いまわれ)こゝに來(きた)りしは、天龍(てんりゆう)などの使(つかひ)にあらず、正(ま)しく釋迦(しやくか)の使(つかひ)なり。

月上(つきの上)はまた頌(うた)を以(もつ)て化(け)如來(にらい)の形像(ぎやうざう)に白(ま)し上げた。

アナタの今(いま)の言(こと)ひし佛世尊(ぶつせそん)の御(み)すがたは何(い)なる形相(かすがた)にましますか。我(われ)は聞(き)きまつりて御佛(みほとけ)を想(おも)ひまつらん。尊(たふと)きみすがたを。

時(とき)に化(け)如來(にらい)の形像(ぎやうざう)また月上女(つきの上の女)に答(こた)へたまはく、佛(ほとけ)のすがたは金色(こんじき)に三十二相具(さんじふにさうぐ)はりて、世(よ)の福田(ふくでん)にましますれば佛世尊(ぶつせそん)とは號(なづ)くなり。自(おの)づと一切(さい)の法(はふ)を知(し)り、または衆生心(しゆぜうしん)のうち上中下根(じやうちゆうげこん)のあるを(し)知る、されば佛(ほとけ)と號(なづ)くなり。世間(せけん)の事(こと)を解(げ)ちし及び一切(さい)の法(はふ)を覺(さと)り究(き)め盡(つく)して玉(たま)へば即(すなは)ち佛(ほとけ)と號(なづ)くなり。または衆生(しゆぜう)を教(け)化(け)して度脫(どだつ)し佛(ほとけ)と爲(な)し玉(たま)ふ

故に佛と號くなり。淨戒忍辱進禪那、一切知らざる事ぞなし、即ち佛と號くなり。慈悲と喜捨との心にて、一切の諸魔を降伏し、名聲十方に震動し、無上の覺を得玉へば即ち佛と號くなり。

月上は此頌を聞上りて、何とも歡喜身に充滿し、心に渴仰を生じ、疾く眞の如來を見まほしくて、またかく言れた。

尊き者よ、斯くばかり眞の佛を見まほしき、かゝる清き法を聞き、在家の住居の厭はしき、我今佛を見ますば、飲まず食はず亦眠らんことも樂はざり、本床に坐することも得じ、正しく佛の體相を拜まば何に嬉しからん。佛の出世にあふことは、百千億にも値ひ難し。彼の尊何處に在ますか。

所化の佛の仰せには、今は大林の中に在まして、もろくの徒衆の爲に法を説き、一度見聞するものは、利益を得ること極みなし。汝若し世尊とぼさつ衆を見まつりて微妙の法を聞きたくば、疾く彼處に詣つべしと。時に月上姫は彼の蓮華と化佛とを執

りて、樓閣の上より下りて、父母の許に至りて、其父母に言れるには

吾父母よ見玉へよ。蓮の花は妙にして、上に坐ます尊さを、誰か敬はざるべけん。

金の光は射とほりて家の内にぞ照りわたる。實に不可思議の形相は種々に變轉極みな

し、承れば大林に大聖世尊在すと聞く、種々の供物をとゝのへて共に詣でむ父母

と。父母は聞くより悦びて華香幡蓋を整へ親屬從類したがへて、大林精舎に詣でけり

さてかねて期したる六日も已に過ぎて、第七日に至る時に、無數百千の人々は集ひ

て彼の月上姫の許に來りて、豫期したる男子らは、或は戀にこがれ、または毘耶離城

のあらゆる莊嚴世界を觀て悦ぶ者あり。

月上姫は其身のあでやかなる容姿は人間とは想はれじ。皎潔なる月の光さへ隠るゝ

ばかりの姫の容色、彼の蓮華を執り、其父母及び眷屬と諸の花を持ち香を燻じ、種々

の和雅の樂音に伴はれて其家より出で、街巷に向はれた。時に百千の男子は大いに

叫んで、月上姫に向はれた。腕力に訴へて奪ひ去らんと物すさまじさ言はん方なし。

斯くばかり皎々たる月は阿修羅の手に捕はれむかと危機一髪の間に、雲間より仄かに出たる月上姫は、其男子の群のはやてに襲はれ群雲の疾く来るを見て、忽ちに飛騰りて虚空にあること一多羅樹ほどなり。乃ち彼の花を執りて、空中に住立し、實に群雲より仄かに出でし月上の靈姿光は四方を照す許り、青蓮の眸を輝かして、群衆を眺め丹果の唇を動かして、群がり集へる男子等に向ふて、朗らかなる音聲を以て頷うて云はく、

吾最と愛する男子らよ、我今此身は過し世に、六根常に調のひて、清き行爲より受けし、世々に磨きし魂を、本とし咲きし花なれば、仇し男子の浮風に吹きちらさるゝものならじ。いとも賢き男子らよ。我は君らを真心に吾父上よ兄君と、きよくぞ愛して慕ふなれば、君も我を真心に女とおもひ妹と、きよく愛して玉はらばいかにかうれしかるべけれ。しらすや妹と脊のみちは、永恒にかはらぬ眞理をば互にむつみ合うてこそ、眞の契りは結ぶなれ、あだになまめき面にのみ、あらはる色にあくがれて、内

に潜める賢徳をしらぬ男子の愚さよ、形を見ればいと猛き鬼神を欺くますら夫も、心
はあだしたをやめの、捕子となるのかよはさよ、また淺ましき男子らは、欲火に胸を
焦されて、いろの奴隷となるもあり、暴力加へて婦を奪ふ、野蠻の婚儀に猛獸の、犠
牲となる女子の、不幸のほどこそあはれなり。黄金や財を頼とし、娶りし女子はさり
ながら、じつは己がものならで、金の妻とはいふべけれ。男子よ自らかへりみよ、己
が心を清らかに、正しき道を行ふて、賢徳我に備はれば、かしこき女子は君たちの、
徳のたかきをきしりて、低きに流る水の如と、まこゝろにして慕ふなれ、君らは今
よりまこゝろに、眞理の道を求めてぞ、自ら意を淨して、道德其身を修めては、配偶
宜しきをうるときは、庭に光榮の花匂ひ、幸ある好き果は結ぶなれ。天つみおやの聖
旨にかなふ婚姻の幸福は、ひとり其身に止まらず、子々孫々にも榮あり、眞理により
て結びたる、契りは此世のみならず、後の世までも諸ともに、花のみやこに入るべけ
れ。

月上姫つきのおへひめの此頌このうたの聲こゑは、衆人しゅじんに大感動だいかんどうを與あたへた。無量むりやうの諸天しよてんの歡呼くわんこの聲こゑが天てんに響ひびき渡わたつた。天てんより華はなを雨あめらし、音樂おんがくの聲こゑは暫しばし止やまなかつた。爾時そのときに男子だんしの群むねは此光景このくわうけいを見つきのへひめ、月上姫つきのおへひめが清淨心しやうじゆしんより流出ながれだしたる頌うたを聞きいて、彼等かれらが胸むねの奥おくに潜伏せんぷくしたる靈性れいせうも開示かひじされ、さすがは良心りやうしんに疚やましかりけん、忽たちまちに情慾じやうよくの熱火ねつくもさめて、清涼せいりやうの想おぼしを起おこし未嘗みぜ有あの感かにうたれ、身みの毛けも豎たちて、更さらに情慾じやうよくの惱なやみも起おこらざりけり。また若もしも意いを遂さげざれば腕力わんりよくに訴うつたもとの暴戾ほうれいの心こゝろも變へんじて、溫良をんりやうの心こゝろと化くわし、還かへつて歡喜くわんぎを以もつて其身そのみに潤うるほひ、各々おの／＼互たひに父母兄弟ふぼけいだいの想おもひをなして、すべての煩惱ぼんノウも止やんで清きき心こゝろとなり各々おの／＼月上姫つきのおへひめを敬禮けいらいし、大衆だしゆの齋いたらす處ところの香花かうけ末まつ香華かうけ髮け等を悉ことごとくく月上姫つきのおへひめに向むかて散擲ちらしなげた處ところが佛神力ぶつじんりきの故ゆゑに其物そのものが彼かの化佛けがぶつの上うへに止とどまりて、一の繖蓋さんがいとなつた。爾時そのときに月上姫つきのおへひめは虚空そらより下おりて、須臾すゆにして毘耶離城びやりじやうを出いでて、釋迦如來しやくかによらいの處ところに向むかふことになられた。そこで集あつまりし衆人しゅじんも共々ともともに月上姫つきのおへひめに従したがひて去まつた。

爾時そのときに長老舍利ちやうらうしやりが數多いふたの比丘衆びくしゆと共に、晨朝あさに衣鉢えはちを整ととのへ鉢はちを持もつて乞鉢きふつしながら、

毘耶離城に向はれた。彼の比丘衆は遙かに月上姫が大衆に圍まれて來るを見て、舍利弗が摩訶迦葉に言ふには、迦葉長老よ、向ふより來る月上姫が此より世尊の處に往くのである。就いては彼女に逆問して試みようではないか。彼が忍を得たるや否やと。そこで、彼女の所におしよせた。そして汝は今や何處に去らるゝのであると問うた。月上答へて、

舍利弗尊者よ、アナタが今妾に何に去るかとの御問であるが、我今舍利弗の如くに去るのみ。

舍利弗は否、我は今毘耶離城に入るので、汝今は出るのでないか、然るに同じやうに去るとは怪しいではないかと。月上、舍利弗に答へて、

アナタは舉足下足共に何處に依るのであるかと。

舍利弗言く、我は舉足下足共に虚空に依ると。

月上は曰く、されば我も舉足下足虚空に依るのである。虚空界には分別が出来ぬか

らアナタと同じ様に去ると云つたのである。然らばアナタは全體何の所に行くのであるかと。

舍利弗は曰く、我は涅槃に向つて行くのであると。彼女の曰ふには、

舍利弗よ、一切諸法涅槃に向つて行かぬ法がありませんか、故に我も涅槃に向ふて行くのであると。舍利弗また彼女に問ふた、

一切法が皆自ら涅槃に向ふとならば、汝今いかで滅度せざるのであると。彼女の女の云はく、

尊者よ、若し涅槃に向ふなら滅度せざるのである。なせなれば其涅槃の行とは不生滅であるから、本来真理の實體は本自不生の真理の故にまた滅すべきではない。涅槃とは本来常恒永遠に生きどふしの法ではないか、生きどふしの真理がいかで滅しませうと。舍利弗は彼女に重ねて問ふた。

女よ、今御身は大小乗の中何の乗に行ふや、聲聞乗であるか、縁覺乗か、または

大乘であるかと。彼女が答へて、

それは尊者よ、還つてアナタに問ひ度いのである。アナタは聲聞乗を行ふか、または縁覺乗か、大乘であるかと。舍利弗また彼女に答へて、

女よ、かやうに言を作すのは理でない。なせなれば法の眞理は實は絶對的にて、三乗とか一乗とか分別すべきものではない。一とも多とも云はれないのである、と云へば、女は曰く、

されば、尊者よ、眞理は絶對なものであるから、一とも異とも分別すべきものではない。涅槃は絶對であるから、實は滅すべきものでない。

舍利弗は彼女を試みんと置いて、眞理の底を叩いて、報へられた。あゝ希有なり、女よ全體御身は、かやうに辨才無碍を得たのには、昔世に幾千の佛に侍へ奉りて斯くなりしや、との間に、女は、

尊者よ、幾千の佛に侍へ奉りしやとの問なれども、猶實際虛空際法界の如くなりと。

舍利弗曰く、然らば實際及法界とは幾許ある哉。女答へて曰く。

無明や愛などと異なることなしと。

然らば無明や愛は幾許ありや。女答へて、

衆生界と異なることがない。

然らば衆生界は幾許ありや。女答へて、

過去未來現在の諸佛の境界の如くである。

斯の如く真理の辯論は無碍自在にて、大いに舍利弗尊者等を感じせしめた。爾時に
 摩訶迦葉が舍利弗長老に告げらるゝには、舍利弗兄よ、此女今佛世尊の御許に詣でて
 は必らず常に大法義あるべし。就いては我等も亦廻り還らうではないか。假令一食を
 斷つとも、法味を喰ふには如かざるべしとて聲聞衆等は遂に月上と共に佛の許に向ふ
 ことになつた。

月上姫は漸く大林の内の茅草精舎に至り、佛の所に詣でて佛の足を頂禮し右に繞る

こと三匝し、持ちし香花末香衣服寶幡寶蓋等を佛の上に散らす。彼の大衆等も其所持の物を悉く佛の上に散ずれば其散ずる所の物悉く一の華蓋となる。

爾時に童子の文殊師利が彼の月上に向ふて是やうに告げられた。

汝は昔世に何にて身を捨て、此に來生したので又此身を捨てた後は何の處にか生るゝのであると。彼の女は、

文殊師利よアナタは如何想ふ、妾が今執る所の如來の形像が蓮華に坐し玉ふ者は何にて身を捨て此に來生したので、また此を捨て、後に何れの處に生るゝのでせう、と問へば、文殊師利は、

此は化像のみ、化なるものには身を捨つるもまた生るゝものはないと。女の言はく、されば、又文殊師利よ、一切諸法の體の化なること此化と異なることとはない。實際に於て捨つるも生るゝもありませうか。

次に不空見菩薩が月上姫に問ひなされるには、月上よ既に女身にては成佛は稱ふま

じきに、何なれば御身は女身を轉せぬのであると。女曰く、

善男子よ空體は廻轉することがない。一切諸法もまた是の如し。何ぞ我女身を轉ずることを得む。

次に持地菩薩が問ひかけた。

女よ御身は曾て如來を見奉ることありしやと。答へて、

善男子よ、我は如來を見奉る我手中の化佛の如く異なることはない。若し差別あるを見れば、そは眞の如來と見ることが能はざるからである。

次に辨聚菩薩が問ひかけた。

女よ、御身は今能く眞理を辨するを得るや。答へて、

善男子よ、眞理の體は絶對にして決して言を以て説くべきものでない。若し説くといはば、其は唯假の名字のみである。

無碍菩薩が問はるゝに、

女よ、御身は過去の諸佛に何なる法を聞きたりや。答へて、

善男子よ、仰いで大虚を觀すべき如く、如來の説法は大虚と異なることがない。其聽く者も亦復かやうである。

次に虚空藏菩薩が女に問はれた。

女よ、御身は昔世に佛に供養をしては何なる心で回向をされしぞ。答へて、

善男子よ、此化佛に供養するも、佛や僧に供養するのとその功德いかゞと。虚空藏菩薩の曰はく、

此は化佛の像なればたとひ布施するも功德はないと。女曰く、

善男子よ、昔世の佛及び衆僧に供養するは此化佛に供養する如くに供養し奉りしのであると。

不損他心菩薩また是やうに言はれた。

御身今一切の衆生に於て、等しく慈悲を普ねくすることを得べきやと。女曰く、

等しく異なることがない。其所以は衆生の事は過去も未來も現在もない。慈悲にもまた三世に別はないと。

尚諸の菩薩聲聞などが、交代に甚深の法を問ふに無碍の辯を以て答へられた。月上が處女の身を以て、諸大菩薩衆に對して對等に論談し屈せざるのさまを見て、舍利弗が佛世尊に白し上げられた。

世尊よ、希有なり、此女に是やうな辯才ありて能く菩薩中の龍象等と對等に論談し卓立して屈せず敬禮せざるは何故ぞと。月上は之を聞いて、直に舍利弗にかやうに言はれた。尊舍利弗よ、今譬を以て妾が演べんことを聞き玉へ。火は少なれども焚物だにあらばいくらでも焼盡すものであるか、または火が本少なる故にすべてを焼き盡すことはできぬものでありますかと。

舍利弗の言はく、火には大小はない。無盡に焼きつくす力を有つてゐる。

然らば尊者よ、菩提心を發したる者は即ち一切煩惱を焚く火である。初發心の焚始

めの菩薩でも煩惱を燒盡したる佛とても理に於て異なることはない。菩提心の智火を以て、一切の煩惱を燒くに、若くは自己の煩惱亦は他人の煩惱にても盡く焚盡さざれば火は消えぬのである。

舍利弗女に問ふ。然らば御身は當に無上正覺を成就する時に其佛の刹土は何である女答へて、

我成佛の刹土には小行小智意の狭き、今日の舍利弗の如き者は見たくも見ることはできぬのであると。舍利弗答へて、

女よ、先に御身は一切法界と如來體等しく異なることが無いと説いたではないか。然るに今は成佛の曉に勝劣があると云ふは何ん。女の言はく、

尊者よ、譬へば大海の水と手の跡の水とは水の性には異なることはない。然れども量に於ては同じくない。手の跡に大海水を容るることはできぬ。聲聞の手跡。諸佛の大海水を容るゝことは不可能。諸佛も聲聞も法界は同一なれども、諸の聲聞などには

無盡無邊の衆生を攝取して度すことは不可能である。又舍利弗尊者よ、譬へば芥子粒の内の虚空も、十方世界の虚空も空には異りなけれども、芥子粒の内に十方世界を容るゝことは能きぬ。尊者よ、空無相無願の眞理は、諸佛も聲聞も同一なれども、聲聞等には無量無邊の衆生を大利益することは能はず。

舍利弗重ねて女に問ふた。

佛と聲聞と得る所の解脱は等しきに非ずやと。女の言はく、

尊者よ、是やうな説をなすこと勿れ。何なれば然らば尊者よ、アナタに解脱自由が能ふならば、此三千世界平なる掌の如くなること能ふべきや。また一切衆生の煩惱を除くことが能ふか。また一切諸天がアナタを頂禮するかいかど、また一切惡魔を降伏することができるか。また一念の智慧を以て正覺を成ずることが出來得るか。

舍利弗の言はく、

是の如きの事一もあることがない。

然らば尊者よ、諸佛正覺の解脫は自由である。聲聞の解脫と決して同一でないことを記憶し玉へ。爾時に世尊、月上姫を讚して、善哉善哉、女よ汝は能く眞理を發明して無碍の辯を得た。爾時に前の化佛の形像が月上の右手の華より起て、世尊の所に至り周ること三匝して世尊の臍に入る。時に大地震動した。

爾時に世尊一々の毛孔より一の白蓮華を出し眞金の如く一切功德の寶を以て莊嚴し彼華の上に一化佛結跏趺坐し 彼如來所化の形像衆相莊嚴遍ねく十方世界に到つて自然に顯現して、一々衆生の心蓮華に坐して爲に說法し玉ふ。時に月上具さに是の如き勝妙の神通を見て、歡喜踴躍して其身に充滿し、自ら勝へず右手の蓮華を如來の身上に投ぐれば、其華到つて佛の頂きに在りて一の花帳となりて、其帳方整にして四柱あり。自然に化して衆の寶を以て莊嚴せり。其座上に忽然として復た一の化佛形像踏坐し玉ひて分明なり。月上彼花を投ぐる時は願を作す。世尊よ願はくば、我此善根の因縁力を以て衆生の我相に住する者の爲に說法して我相を除かしめ玉へと。次に佛神

力の故に、第二の蓮華其右の手に現す。此花をまた如來に向ひて投ずれば如來の上に
 第二帳となり、衆寶を以て莊嚴す。彼女又願ふらく、願くば此善根の因縁を以て、未
 來世若し衆生の我見に住する者の爲に說法して我見を除かしめ玉へと。次に第三の花
 も上の如く第三花帳となる。そこで又願くば此善根の因縁未來世一切分別相の衆生に
 說法して其分別及び貪瞋痴等を除かしめ玉へと。第四の時には、願はくば未來衆生四
 顛倒に住する者の爲に說法して、四顛倒を除かしめ玉へと。第五華帳の時には、願は
 くば此善根の因縁に仍りて未來世の五蓋に住する衆生の五蓋を除かしめ玉へと。第六
 の時には衆生の六入に着する者の爲に六入の着を除かしめ玉へと。第七の華帳現する時
 には、願はくば衆生の七識に住する者の爲に說法して除かしめ玉へと。第八の華帳現
 する時は、衆生の八顛倒執着を除かしめ玉へと。第九の華帳の時は衆生の九使を除
 かしめ玉へと。第十華帳現する時は當來に十力を具足して今の卅尊の如く。十方を照し
 て異なることなげんと。

爾時に世尊微笑し玉へば口より種々の光を放ち、無邊の佛土を照し、光明威神勝盛無比晃耀として、還つて佛頂に入る。

時に長老阿難、恭しく合掌して佛微笑放光の因縁を問奉つる。

一切智慧の光にて、普ねく世間を照します。微笑し玉ふ因縁は、往昔劫數諸の、

功德を積みて世に高く、萬法今は具はりて、威神極まりなかりける。一切聖中の聖光

明放ちて微笑し玉ふ。唯願くば尊中尊、淨意の光何因ぞ。大衆の爲に説き玉へと。

爾時に世尊頷を以て報へて曰く、

阿難よ、童女を見よ、合掌歸依してこゝにあり、諸佛神通の相を見て、無上の道心

發しにき、過去に數多の佛に見ひ、生々世々に深く尊重恭敬して眞理を得んと願ひに

し生處道心忘れざる、昔如来迦葉佛と、樓上にして身を墜し、彼の世尊に供養して、

無生の法忍得たりしが、次にクル尊佛に遇ひ、一具の妙衣奉り、現に金色の體を得て

清淨にして月に超え、世尊の世にはまた、香花末香供へては、口より妙香放ち

ては恰も栴檀の如くなり。尸棄兩足尊に見えては、世尊を瞻仰七日滿ち眸青蓮の如
 き得て觀るもの厭ふことぞなき。汚の五欲を厭ひては、常に清淨を行へり。されば來
 りて觀んものも、自ら清き心となる。三十三天の生をへて、來りて離車の家に出で、
 一切生處に過去を知り、巧説偈頌極みなく、父母及び一切の有縁を教化限りなし。豪
 貴離車に生れては、童男一切の男女をば、教へて佛乘に入らしめぬ。數多の衆生を感
 化して、女身を轉じ出家して、廣く梵行を行へり、此に命の終りては、天に生じてま
 た此に、末世に我法を護りては、衆生に利益を施せり。またトツツに生れては彌勒と
 共に下生して、轉輪王の子となりて、彌勒世尊に供養して、佛に従ひ出家して、數多
 の衆生を教へては、佛の正法護持なしぬ。清淨安樂土に生じ、阿彌陀世尊に見えてぞ
 禮拜尊重供養なし、賢劫諸佛の刹に於て、十方一切如來に供養し、具に六度萬行を修
 して、無量の衆生を度し、後に八萬億劫に、作佛し月上尊と名く、眉間白毫光を
 出し、普ねく佛刹照しては、光被るもの皆解脱す、國に二乗の敗種なし、菩薩は身

色具足して、住世七十三千劫、………

月上如來の授記を被ぶりて、歡喜すること無量、月上即ち女身を轉じて變じて男子となり、即時大地震動し、光明照り渡れり。月上菩薩歡喜のあまり、新しき頤を以て如來を讚し奉つる。

中華佛敎の曙光

一四二

中華即ち支那の國は世界の中にも古き國にて最も人口の多い國である。現代は大に國勢も衰へ老大國として世界から疎んせられてゐるけれども、古へ最も隆盛なる時代には偉人が叢の如くに輩出したる國である。後漢より唐宋の代に至るまでには大人物が澤山出た。其の大国の精神の靈的方面を照して永遠の光明に導きたるは即ち佛敎である。若し夫れ支那の國に佛敎の光りがなかつたならば幾億萬の人民は闇より闇に入るの外に道なかりしや疑ふべからず。慙く數百年來無量億兆の精神界を照したる佛敎が支那に入らんとするには必ずや之が前兆なくてはならぬ。支那幾億兆の心靈を永遠の光明に導かんとしての象徴として其の曙光としては如何なる瑞相を以て如何なる人に大ミオヤは啓示の光を與へたる哉を述べんとす。

後漢孝明天皇永平十三年に主上の夢に神人を見たり、金色にして御丈六尺、項に日

光の如くに圓光徹照して其の靈德赫々として尊きこと限りなかりしかば、帝は辱さに勝へず、寤めて後に諸の臣下に問はせられた。すると博士の傅毅が御答申上ぐるやう、西方に聖人あり、其の教行はるれば治めずして自ら治まり、無爲にして成る、何とも名づけやうなし、強て佛と云ふ、陛下の夢み給ふところ果して然らんと。

孝明皇帝が金色相好圓滿の光明赫々たる靈夢が即ち中華人民の心靈を照す光明の曙光であつた。

皇帝は臣の蔡焜等を使はして佛教を天竺に求めしめた。すると西域よりも加葉と摩騰笠法蘭との學行共に秀でたる兩尊者が白馬に梵本を載せて來るに遇へり。使者は悦び請じ來りて初めて皇帝に謁したり。兩尊者の神異不測なると佛陀の尊とさに帝は益々歸依し給ひ、或日帝は摩騰法師に問ひ給ふに、法王釋尊が世に出で給ふに、何故に此の國に出で給はざりしやと。法師此に答へて曰く、迦毘羅衛國は三千界の中心なれば三世の諸佛も皆彼處に出生なされ玉へり。されば天龍八部も皆そこに生れて佛の

正化を受け、咸く道を悟ることを得たので、餘處に生れ給ふたのでは充分に化を施すことが出来ぬ、故に天竺に御生れなされたのである、けれども漸々に其教は四方に傳はりて、廣く化を施し給ふのであると。

佛陀の光明は皇帝及び百官より益々其の威光を普く國民の上にも及ぼす、勢力は、恰も日光が先づ高山を照して後に漸々に平地に及ぼすが如き觀がある。永平十四年正月一日支那に其昔より盛に行はれたる處の道教なるものあり、五嶽の道士等が正月朝禮の爲に參内するの次で、其の仲間に相命じて曰く、今天子我が道教を棄て遠き外國の教を求むる、依て朝禮を機として表を以て抗議を奏上しようではないかと。其の表に曰く、五嶽十八山觀太上三洞の弟子褚善信等の六百九十人死罪々々奏上す。臣聞く、太上は無形無名無極無上虛無自然の大道は造化の前に在り、上古より同じく此道に遵つて百王も易へ給はざりし。然るに今陛下は道義遙に邁へ徳は堯舜よりも高し、竊に承はるに陛下は本を棄て末を追ふて、教を西域に求め、而して其の奉ずる處の

神は是れ胡神なり。其の説く處は華夏に參らず。願くば陛下よ臣等が罪を恕して、何れの法が尊いか與に試験し給ふて後用ひ給へよ。臣等の仲間道士の中にも或は徹視眼もあれば、遠聽耳もあり、又博く經典に通じて元皇より已來、太上の群録太虚の符呪まで悉く綜練して、其奥に達せざるなきものあり、或は鬼神を使役し霞を呑み氣を飲み、或は火に入りても焚けず水を履んでも溺れず、或は白晝に昇天し、或は形を不測に隠す、等の方術に至りては如何なることも成し能はざる處なし、恁やうな譯なれば、願くば其と比較し何れが正しき法にして陛下の信じなされて宜しきやを定め給へ。一には聖上の聖意を安んせんがため、二には眞僞を辨ずるため、三には大道の歸する處を得んため、四には華俗を亂さざらんために、臣等が願ふ所を聽して、若し比對して我が法彼に若かすんば、陛下の聖意に任せ奉らむ。若し臣等勝つことあらば、妄法をば捨て給へと。帝之を聽し給ひ、勅して尙書令宋庠を遣はして、長樂宮に入て今月十五日を以て集まるべしと命じ給ふ。白馬寺の道士等は三壇を置き壇毎に二

十四門を開き、南岳の道士褚善信等は各靈寶真文等の五百九十卷を齎して西壇に置
 き、茅成子老子等の二十七家の書の中壇に置き、饌食奠祀、百神を東壇に置く。帝は行
 殿に御して寺の南門に在す。佛舍利經像を道の西に置く。十五日齋已りて、道士等が
 柴荻を壇に和して沈香を炬と爲して經を繞つて泣いて曰く、臣等太極大道元始天尊衆
 仙百靈に上啓す、今胡の神が中夏に亂入して主上邪を信じて正教は蹤を失ひ、玄風緒
 を墜す。臣等が敢て經を壇上に置いて火を以て試験し奉るから、尊き心を開示して眞僞
 を辨ずることを得せしめ給へと。誓て便ち火を經に縱てば經に火を點するや忽ちに化
 して悉く熄燼となりし。而して道士等は互に相顧みて色を失ひ、大に怖れおのゝき、
 天に昇つて形を隠したくも力及ばず、鬼神を使ふもの幾ら呼んでも應なく、各々愧慙
 を懷きて、如何とも爲すること能はず、南嶽道士費叔才は自ら憾んで遂に死す、大傅
 張衍が褚信に語つて曰く、師が試る所驗なし。其は是れ虚妄の法なればなり、寧
 る之を捨て、宜しく西天より來れる眞法に就くに如かざるべしと、云ひければ、褚信

が曰く、茅成子曰く、太上と云は靈寶天尊のことである、之れ造化の神である、故に妄にあらすと。衍が曰く、太素は貴徳の名はあれども、何にも太素の説いたものは無い、然るに今子が言教ありと説く、是れ妄ではないか。信默然たり。又一方に佛舍利の光明は五色にして空中に上つて旋環して天蓋の如く、普く大衆を覆うて日光を蔽はるゝ程耀けり。摩騰法師は身を躍らして高く飛んで空中に坐臥し、廣く神變を現じ、天より寶華を雨らして僧の上に散す。又天樂の聲人の情を感動す。大衆咸く未曾有なりと悦び、皆々法蘭を繞りて法要を聽き、梵音を以て佛功徳を歎す。衆皆之を聽きて自ら三寶を稱揚せしめ、善惡の業は皆果報あり、六道三乘の諸相は同じからずと、又出家の功徳を説く。初めて佛寺を建つれば梵天の福と同じと説きければ、司空揚城候劉峻、諸の官人士等千人出家、四嶽の道士呂惠通等六百二十人出家す。陰夫人王婕姉等、宮人婦女二百二十人出家す。十餘所の寺を立つと。

中華億兆の心靈を照す曙光として兆候として孝明皇帝の靈夢に現れたる圓光徹照せる端正無比なる金色の神尊が頓て四百餘州の精神を照す本尊佛の啓示ならん。嗚呼尊い哉。

孝明皇帝の靈夢に就いて

嚮に中華佛教の曙光と題して佛教が始めて漢土に渡り來りし時に後漢の孝明皇帝の靈夢に感したる丈六の尊容、眞金色にして圓光徹照して威神尊嚴なる靈相の啓示せられしことは是れ正しく東亞半世界のあらゆる人の心の本尊として觀想し奉るべき表相と信ずることを演べたりき。

如來は本、法身大智慧の相にて十方法界一切の處に周徧せざる所なし。故に機緣熟する時は何れの處にても應現の靈相を感すべきである。然して假令夢になりとも一度此の靈感を得たならば其は全く如來の實在の一分を啓示せられしことなれば自己の心

の本尊として其の表相に依りて常に自心の制裁と爲り指導となり心靈を靈的活躍の原動力と爲り、無限の泉源となりて宗教心を活すものである。法華靈量品の意に依れば唯形の方にのみあくがれて居る人の爲には此の世界にては佛には容易に遇ふことは難いけれども眞に質直に靈の方面に如來にあくがれて一心に觀ま欲しと思ふて身命を惜まざる底の人の爲には其の心眼の前に現れて、爲に說法し給ふと示されてある。寔に靈にあくがれて居る人の心に映寫し來る靈應の閃きは不可思議である。常に天の方に靈に憧れたる彼のプラトールが理想の愛をのべて美は天上の容姿に伴ひて輝きつゝあるもの彼れ若し地上の現前に現れ來ると雖も其の最も純潔なる感覺の隙より其の清き光りを發するもの、若し人世に生れて素朴にして且つ前世に於て常に光榮を觀得したりし人は其の神的清貌を見て神聖端嚴なる相好に驚愕せざるはなし。先づ一瞥の下に悚然として身戦き亦宿世の畏敬の餘情は自ら油然として湧き來り恰も神像に對する如くに身を投じて之が犠牲たることを辭せざるべし、とは靈的哲人の感想を示せるも

のならん。思ふに斯く靈感を蒙る程の孝明帝のことなれば帝の心には其の感したる靈相が一方には心の本尊として威容赫々として照臨し、一面には法悦の泉源として熙怡快樂の餘情極りなかりしや瞭なり。

宗教心には凭の如き靈相を以て其人の心意を照鑑し給ふ本尊として日常行爲の指導の源となり、又精神生活の慰安とし法悦として處世の内容を高尙に又豊富にするものである。

辨榮自ら謂ふに幼時十二歳、家に在りし時杉林の繁れる前に在りて西の天霽れわたり、空中に想像にはあれども三尊の尊容儼臨し給ふことを想見して何となく其の靈容に憧憬して自ら願すらく、我れ今此の想見せし聖容を靈的實現として瞻仰し奉らんと欲して欽慕措くこと能はざりき。後二十四の時に東京駒込の吉祥寺學林に於て圀山上人の五教章の聴講に列なりし時田端の東覺寺に寄宿して吉祥寺に通ふ往復にも口に稱名を唱へ意に専ら彌陀の聖容を想ひ専ら神を凝しけるに一旦蕩然として曠廓極まりな

さを覺え、其時に彌陀の靈相を感じ、慈悲の眸、丹花の唇等、其の靈容を想ふ時身心融液にして不可思議なるを感ず、其後は常に念に隨て現す。殊に朝日輝く方に向うて靈容の笑める大悲の御姿を想ふ時、靈感極りなきを感じければ頌ふて曰く、
我がみほとけの慈悲の面、朝日の方に映るにて、照るみすがたを想はへば、靈感極りなかりけり。

凭く心の宮殿に如來を本尊として信念する時は尊とく辱けなさを感ず。斯く如來と離れざる親密の因縁の宗教を中心眞髓と爲す。

有ゆる靈の力は是より發動す。是が道德の原動力である。一には自分は意志の弱きもの、自ら己れを自由に制裁することの出来ぬものなれども、唯真正面に在す神聖なる慈悲なる如來の在すと念する時に聖意に隨つて光明の大道に進まんと欲する意思が惹き起される。二には感情に於て種々の煩悶懊惱する場合にも真正面に在ます慈悲の溫容を思ひ浮ぶ時は自づと身も心も融液快然として心機一轉し、歡喜光裡に栖み遊ぶ

やうに爲る。

三には現在より永遠の生命を得る自覺の光明を與へらるゝことに爲る。

孝明皇帝の靈感に因みて自己の感想を述べて諸の同朋衆に告ぐ。若し信仰の縁とも
ならば是れ、ミオヤの恩寵なり。

善導大師

聖善導は大唐に於て専ら彌陀の光明を宣傳なされたる祖である。自ら彌陀の光明に於て心靈に活き活ける靈光を以て當時の士女老若を問はず之に接する者は悉く靈に復活せしめたる其の教化の盛なる實に烈火の勢であつた。されば瑞應傳に佛法東行してより未だ師の如く盛徳なるはあらずと。佛法が漢地に渡りて凡そ六百年無數の知識高德輩出せしも眞の宗教的素質を以て自行化他の盛なる實に導師の如く盛徳なるはなかるべし。されば瑞應傳の讚歎過分にあらず。導師は佛教中のポーロである。導師の光明宣傳は現代と異つて居る故に後生主義である其は時代の然らしむる所、然れども自行化他彌陀の光明を以て時の人格を靈に活かして光明の生活に入れしめたことは疑ふ餘地がない。光明主義宣傳の大唐の祖として今、忍徴上人の大師傳に依て光明主義の同胞に紹介せんとす。

大師諱は善導字は淨業と云ふ。阿彌陀佛の化身であると。其本、何れの人たるを明かにせず。或は姓は朱氏にて幼にして密州の明騰法師に就て出家せられ、初めに法華經や維摩經を誦し給ふた。或時西方極樂淨土莊嚴の曼陀羅を見て深刻に印象を與られ歎じて曰く何にして當に質を蓮臺に托して神を淨土に棲ましむべしと。意は此の穢惡なる肉體を取り換て蓮華の上に生ける法性常樂自然虛無の身となり、神を無漏の淨土に栖みあそぶことに爲りたいとの心である。

具足戒を受けてのち妙戒律師と云ふ方と共に觀經を看て非常に感激せられ悲喜交々起つて今迄久しく迂僻の道に徒らに心を勞して居つた、若しも此經に遇はなくば逆も度かることは出来ぬ、此の經こそは眞に佛道に入るの要津である餘の行業を修すれば迂僻にして成就し難い唯此の法門のみ速かに生死を超ゆべし、我幸なる哉今この法を得たり。

忽ちに自ら思ふに教門は必ずしも何人も同じ一道一途より入るにあらず若し自己の

機根に適せずば功即ち徒らに設けん。佛の教門甚だ多途なり何れの經か全く自己の機に契ふかを知らんが爲に大藏經に投て手に信せて之を探ぐるに觀經を得たり。便ち喜んで誦習なされ恒に誦かに思惟し冥想して淨土を觀想す、是に於て篤勤精修して頭燃を救ふ如くになされた。

昔の惠遠法師の偉大なる高德の芳躅を欣慕して遂に廬山に往きて其の規模の大なるを視て乃ち廓然として遠師の如くに念佛三昧に由て道を得んとのお思ひを増なされた。其後歴々各地の高德名師を訪ひ遠く沙門に求むるに修行の功微に理の深きこと又般舟念佛三昧に出づるものあらず、斯の念佛三昧發得するにあらずば寧ろ死すとも動せずと畢命を期して修し給ふ。

有縁の地を下して終南の悟真寺に遁れ給ふ。爰に於て一心に三昧を修するに未だ數年を出ざるに觀想彌々勸みて疲勞を忘れて已に三昧の深妙を成じ三昧中に備さに淨土の寶閣瑤池金座等を觀て宛ら目前に現れしかば涕を流し身を地に投じて之れ皆佛恩

の然らしむる處と感謝して曰く既に三昧成就して淨土を感見す是れ當に證を得たれば先づ今よりは有縁の地に於て餘の人々に彌陀の慈悲を傳へんものと。

初めに西河の道綽禪師が晉陽と云ふ處にて方等懺法をつとめ又、九品道場にて觀經を講じて念佛を弘通することを聞て其を慕ふて貞觀十五年千里を遠しとせずして往て道を問べく旅立ちなされた。時しも玄冬の首に逢ひ風が落葉を翻して深き坑填まれり之れ此の落葉に滿たる深坑こそ修行に適する處とて遂に瓶と鉢とを携へて其の坑中に入て安座念佛して精神が三昧に耽りて覺えざるに已に數日を経過しぬ。乃ち空中に聲ありて曰く是より前み往けよ遊履してまた停滯する勿れと、遂に坑を出で前程に進みて道綽禪師の所に至りて豫ての宿心を述べければ綽公より觀經を授けられしかば師は卷を披きて之を詳かにするに比來の觀る所淨土の勝相に宛然として目前に現はれ即ち定に入つて七日間起ち給はざりし。

或人師に御尋ね申して曰く弟子平常に念佛して往生を願ふけれども往生が得らるゝ

や否いなやと。師しの曰いはく各かく一葉えふの蓮華れんげを辨べんじて之これを佛前ぶつぜんの乾かわける地ちに挿さみて七日間かかんじやう行道だうして花はなが萎しはまざれば即すなはち往生わうじやうを得しるる兆しるしであると。之これに依よつて七日間かかんじやう勤つとむるに果はたして花はなが萎しはまざるを見みて直たぢらちに往生わうじやうの決定けつじやうせるを知しると。

道だう綽じやく禪ぜん師しが師しのいかにも三昧さいの深詣じんけいを歎たんじて因ちなみに師しに問とふて曰いはく願ねがはくは師しよ定ぢやうに入はいつ道だう綽じやくが往生わうじやう得えらるゝや否いなやを觀み給たまへよと。師しは即すなはち三昧さいに入いるに佛身ぶつしんの百餘尺よじやくなる大身だいしん現げんじ給たまふ問とふて曰いはく、道だう綽じやくは現げんに念佛ねんぶつ三昧さいを修しゆして居ゐるけれども正ましく報身ほうしんの土どに往生わうじやうを得うべきや否いなや自ら知しらざれば之これを告つげ知しらせ給たまへ猶なほ又また何年なんねん何月なんげつに往生わうじやうするやと。佛ほとけの曰いはく『樹きを伐きらんには連しきりに斧のこを下くだせ、縁えんなきには共ともに語かたること勿なかれ、家に還かへらんには苦くを辭じすること勿なかれ。又また當まさに道だう綽じやくに三罪ざいを懺ざん悔げせしめよ然しかすれば方に往生わうじやうすべし。三罪ざいとは一ひとには嘗かつて經きやうと佛像ぶつざうとをば軒端のきはの下したに置おいて自みづからは深房しんぼうに居ゐりし二ふたには功徳こうとくをなすに出家しゆつげの人ひとを驅使くししたり。三さんには屋宇おくうを營造えいざうするに多おほくの蟲むしの命いのちを損傷そんじやうせり。十方佛前はうぶつぜんに於おいて第一だいいちの罪つみを懺ざんし四方ほうの僧そうに回まして第二だいいちの罪つみを悔くひ、一切衆さいしゆ

生の前に於て第三の罪を懺せしめよ。』又問ふ終る時に何の瑞相ありてか人をして見聞せしめん。答て曰く亡する日我百毫の光を放ちて遠く東方を照す此の光り現する時我國に來生すと。大師須臾にして之を綽師に報じて靜かに既往の咎を顧思するに皆云ふこと虚しからず。之に於て洗心懺悔し已て師に見て即ち曰く師の罪滅せり後に白光が照觸すべし是れ師の往生の相なりと。果して終る日三道の毫光房内を照せり。

東都の英法師は華嚴經を講すること四十遍、後に綽禪師の念佛道場に入會して深く三昧に入て念佛の活行なるを悟り嘆じて曰く自ら悔むらば多年空しく文疏を尋ねて身心を勞するのみであつた。何ぞ期せん還つて念佛の不可思議にして人を活かす妙法なりとは。師の曰く實に然り經に誠言あり佛は決して妄語し給はず。續て唐の都なる長安に至りて法水の聲を聞くに曰く念佛を教ゆべしとの佛の啓示を蒙むりて遂に五會教なる會を設けて念佛を以て廣く勸化し給へり。信者の中に至心なる者は師の念佛する時佛が口より出るを見奉つる。三年の後には滿長安城の人皆教化を受けて念佛

す。男女の僧俗を擊發して貴賤賢愚を問ふことなく屠沽の輩に至るまで皆亦開悟せしむ。

師の教化の甚だ熾なるを見て或は嫉み或は憎みて妨害をなすものあり。西京寺の内に在て金剛法師と念佛と餘行との勝劣を校量し給ふ。高座に昇り發願して曰く諸經の中の世尊の説に準するに念佛の一法淨土に生ずることを得、一日七日一念十念定めて淨土に生ず、是れ眞實にして衆生を誑すにあらずば願くは此の堂中の佛の一像をして總て皆光りを放たしめ給へ、若し此の念佛の法が邪惡にして淨土に生せず還て衆生を誑惑するものならば今善導をして高座の上より大地獄に墮して長時に苦を受け永く出期あらざらしめよと。如意杖を執て一堂中の佛像を指し給ふに尊像皆光りを放つ。

釋エケー。師に問ふて云く吾が禪定の力にて即身に三界を離るべきや不や。師曰く佛を去ること既に久し今時の人禪定を修しても心濁り易くして無漏の聖法顯はれ難し心を禪門に安くと雖も輒く三界の牢獄を出ること難し。復問ふ然らば何れの行か成じ

易きぞ。答て曰く西方極樂の行は像末の時も甚だ成じ易し。釋迦教へて曰く無量壽國は往き易く修し易し、然るに人修行して往生すること能はず。

又、千福寺の懷感禪師は自己の修學することに執心強、淳にして精進刻苦して師に従ふ。義が神に入らざれば以て得たりとせざりし。然れば四方の好學者が就くこと霧の如く聚れり。唯念佛少時にして忽に報土の淨土に生ずると云ふこと信じられぬ。疑氷未だ解けざれば遂に師に謁して其の疑團を解かんとす。師の曰く子は能く教を傳て人を度す信じて後講するや茫々として講すること無しと爲んや。感師曰く諸佛の誠言信せずんば講せず。師の曰く若し然らば念佛往生は佛說にして魔說ならんや子若し之を信じて至心に念佛せば當に證驗あるべしと。

乃で感師は大師の教示に依りて即ち道場に入りて念佛するに何の靈瑞をも觀ざりし感師自ら罪障の深きを恨みて食を絶ちて命畢らんと欲せしかども大師許し給はぬ。遂に精進にして三年間念佛して後忽ちに靈瑞を感ず、金色の玉毫を見て便ち念佛三昧

を證得せうとくなされた。自分が宿世しゆくせの垢業くごふ重おもくして妄みだりに學解がくげを以もつて眞しんの佛法ぶつぽうを求もとめたる過あやまちなるを發露懺悔はつろざんげして爲ために群疑論ぐんぎろん七卷しちくわんを編述へんじゆつせられた。

古今ここんを楷定かいちやうす。

大師だいしは古來こらい觀經くわんぎやうの疏義しよぎ多くあれども全まく經きやうの宗致しゆちを眞實しんじつに發見はつけんされてをらぬを歎なげき
て自ら三寶さんぽうに祈いのり靈瑞れいずいを感じかん正ましく佛ほとけの指示しじを蒙かふむりて觀經くわんぎやうの疏四卷しよくわんを著あらして彌陀みだの
願意釋尊ぐわんいしゆくせんの本懷ほんぐわいを顯示けんじなされた。此この觀經くわんぎやうの疏しよを著あらして就つて一切三寶さいしよさんぽうの加護かごを仰あぎ
奉たてまつるに夢ゆめの中に諸佛菩薩しよぶつは及まつ雑色寶山ざうしきほうせん光明くわうみやう等の靈相れいさうを感じかん、毎夜夢中まいよむちゆうに常つねに一いの
僧そうありて玄義げんぎの科文くわもんを指授しじゆし給たまひしが既すでに了おはりては更さらに復またた見えざりしと。

又また往生おうじやうの要行えうぎやうを明あかして將來しやうらいを霽はらさんが爲ために法事讚ほふじさん二卷にくわん觀念法門くわんねんはふもん、往生禮讚おうじやうらいさん、般舟はんじゆ
贊さんかく各一卷くわんを著あらして給たまへり。

大師堂だいしどうに入いつては合掌胡跪がっしやうこきして一心しんに念佛ねんぶつし力ちからの竭つくるにあらざれば休やすみ給たまはず乃な至いたし
寒冷かんれいにも亦汗またあせを流ながすを以もつて其その熱誠ねつせいが現あらはれぬ。出いでては即すなはち人ひとの爲ために淨土じゆつどの法はふを説ふて

諸の道俗を化し道心を發し淨土の行を修せしめて暫時も利益を爲さざることなし。
三十餘年別の寢所なく暫くも睡眠し給はず、洗浴の外は曾て衣を脱がざりし。常に行
道禮佛等を以て己が任となし給ふ。

能く佛の戒品を護持して毫も犯し給はず。嘗て目を舉て女人を視給はず。一切の名
聞利養の心を起すこと無し。又、綺詞戲笑杯は爲給はず。所行の處には自ら節約にて
清淨自活飲食衣服の四事豊富に供養を受けても夫は皆自身に入れ給はず並に他に施こ
し好味食をば大厨に送りて徒衆に供養し自身は唯麤惡の食を受けて纔に身を支ふこと
を得、乳酪醍醐の美食をば飲噉し給はず。

諸の信施を受けては阿彌陀經を寫すこと十萬餘卷、畫く所の淨土の變相三百餘楮を
散施して受持せしむ。故に京師より近郡に至るまで經を誦み佛を念するもの迹を踵で
絶えず。

至る處の破壊の伽藍及び古墳塔廟を見ては皆悉く營造修復し給ふ。佛前に燈明を

獻げ常に絶す、又三衣瓶鉢自ら洗ふて他人の手を煩はすことなし。

平生常に乞鉢を樂みて毎に自ら責て曰く、釋尊さへ分衛し給ふ善導何人ぞ居ながら他の供養を受くべきぞ。又沙彌までも禮を受け給はざりし。諸の有縁を化する爲に毎に自ら獨り行きて衆と共に行かず。世事を談じて念佛の妨げになることを恐るればなり。若し暫くも相見を請ふ者あれば聞かしむるに法を説き或は道場に於て親しく教を爲し、或は曾て念佛の法を少しも見聞なき人の爲には教義を披尋せしめ或は他に教て其をして亦他に展じて淨土の法門を授けしむ。

京華より諸の國々の僧尼士女或は身を高嶺に投げ或は深泉に沈み身を投じ身を焚て供養するもの四邊に聞えて百餘人に垂なんとす。梵行を修し彌陀經を誦むこと十萬乃至三十萬遍に至り念佛すること日に一萬五萬乃至十萬遍に至るもの又、念佛三昧を發得して淨土に往生するもの數を知るべからざるに至る。

長安の屠兒寶藏と云ふものあり、師の勸化を受け念佛するもの長安に滿つるに肉食

を斷ちて敢て肉を買ふものなし、精進する人多きが故に肉の賣れざるは善導の勸化に依る、因て善導を殺害せんとて刀を持ちて寺に往き竟に大師を害せんとす。大師之を見て毫も怖れず西方を指示し給へば空中に淨土の相現はれたり。寶藏之を見て便ち發心し身命を捨て、淨土に生ぜんことを求め自ら高樹に上り阿彌陀佛を念すること十聲樹より落ちて終る。時に人、化佛の天童子を索ひて寶藏が頂門より出るを見たりと。

又或人大師に問て曰く念佛の善淨土に生すべきやと。對て曰く汝が所念の如くならば必ず其の所願を遂ん、對へ已て大師自ら阿彌陀佛を念すること一聲すれば一道の光明其口より出づ。師彼に謂て曰く此身厭ふべし諸苦逼迫す、情偽變易して暫くも休息なし。吾將に西に歸らんとすと、乃ち寺庭の柳樹に登りて西に向ひ願じて曰く願くば佛の威神を以て我を接し我を助けて我が此の心をして正念を失はず彌陀法中に於て退かしめざれと。願じ畢て其樹上に於て端身立化し給ふと。時に京師の士太夫誠を傾けて歸依し咸く其骨を收めて葬むる。高宗皇帝其の念佛する毎に口より光明を放つを知

ろしめし又捨命の時の精至此の如くなるを知り給ひ寺額を光明と賜ふ。

或は曰く所住の寺院の中に於て淨土の變相を寫す忽ち促して急速に成就せしめよと、其故を問へば曰く吾將に往生せんとす、住まること兩三夕のみ忽然として微疾あり怡然として長く逝き給ふ。春秋六十有九、身體柔軟にして容色常の如し、異香音樂久しうして方に歇みぬ、時に永隆二年三月十四日なりき。

佛法東行已來大師の如く盛徳なるはあらずと。

蓮池大師賛して曰く善導大師は世に傳ふ彌陀の化身なりと。其の自行の精嚴に利生の廣博なるを觀るに萬代より已來猶能く人の信心を感發す、若し彌陀にあらざれば必ず觀音普賢の儔ならん。奇哉大哉。

又曰く善導念佛すれば佛、口より出で給ふ、信者皆見て知ぬ。幻術にあらざる是心是佛、人々具足す善導を知らんと欲せば妙純熟にあり。心池水靜かなれば佛日光を映す、業風波を起せば生佛殊に迥かなり。蓮池大師の賛の如く實に大師は彌陀の權化と

して此土に出で、大ミオヤの光明を人格的に現じて世を化す。

光明的人格に接觸するもの如何なる弊惡の漢たるも忽ちに人格革新して光明中の人と化す。大師は大唐の光明主義の祖なればミオヤの光明中に在る讀者衆の爲に斯の偉大なる靈的人格を紹介して賢を見ては齊しからんことを思へとの格言に倣ひて願くば古今同一の大光明中に健全に活きなされんことをお勧めする。

尙、大師の法語に依りて大師の彌陀の信仰に對する如何に彌陀の光明に靈活し給ひし哉を管見を以て汲得たる心相を讀者衆に頒たんと欲す。依て豫め大師の靈的人格のいかに高きかを知り給へ。是れ大師を世の同胞衆に紹介する所以である。

聖徳太子

太子は我國に於て靈の光明を以て國民の精神を闇の中より救ひ出せし神人である。若し夫れ我國にて太子が佛教の光を以て人の心靈を照すの道を開かざりしかば實に幾億萬の生靈は永遠の光を得るに由なく、闇より闇に迷ふて出離の縁あること無きや疑はし。殊に太子は西方淨土より來生してすべてをミオヤの光明に誘引給ふ權化の聖者である。光明主義の首唱者である。さればミオヤの光明を仰ぎて光の生活を希ふものは、太子の行傳を知るべきである。茲に二三の御傳に就て太子を諸君に紹介せん。

太子は用明天皇の第二の皇子にして御母は穴穗部間人皇妃にて在ます。母妃の御夢に金色の僧の容儀いと麗しく輝ける姿にて現はれ宣ふやうに、「我は是れ救世の菩薩(觀世音)である。吾に救世の願あり、暫く妃の御腹に宿させ給へ」と。妃の曰く、「妾

の腹は餘りに垢穢はしい、かて聖者を御宿し申すべきぞ」と辭し給へば亦曰く「吾は穢
 を厭はず唯偏へに衆生を救はんことを思ふのみ」と言畢つてそのまゝ躍りて口の中に
 入ると覺えて後に咽喉の裏に何やら物を呑める様に感じてそれより懐胎の心地し給へ
 り。程なく八ヶ月の後は御胎内にて何か物言ふ聲するを聞き給ひしとの事である。○
 明れば敏達天皇の二年正月朔日に皇妃御遊興の餘り宮中を巡りて厩の戸口にて遽か
 に御産に臨まれて覺えず玉の如き皇子を産ませ給ふた。時に當りて赤黄の光が西方よ
 り來りて産殿の外に照り輝きければ天皇も奇異の想ひを爲し給ひぬ。太子は凡そ御
 懐胎十二ヶ月にして御生れになつたと言ふ事である、恚りければ嬪御驚き抱きて殿に
 上ると。又太子は生れて四月にて能く言のたまひ、又人の舉止をも知り給へりと。又
 其御體軀甚だ香ばしければ抱へ懐くほどの人皆奇しき馥り香は衣に染りて數ヶ月の程
 滅えざりしと。

三歳の春三月御苑に桃花の天々と咲匂ふ朝、父の帝は妃と共に苑にて逍遙し給ひ太

子も乳母に抱かれて従はれしに、帝は戯れに太子に問はせ給ふやう、汝は彼の麗はしき桃の花とまた縁濃かなる松の葉とは孰れを好み賞づる哉と。太子は、兒は松の葉をと答へらる、开は何故ぞと問給へば太子答へて、さればよ、桃の花は一旦の榮なれども松の葉こそ百年も常に變らぬ故なり、と曰まひければ父の帝は深く感じ喜び給ひける。

四歳の春太子は他の少さき王子等と父の帝の殿中に集ひ遊び互に戯れ合ひ果は闘ひ叫ぶ王子もありて頗る噪がしければ父は之を制せんとて頓て御手に笞を携へ喚び召されけるに他の王子たち驚きあはて、孰れも逃げ隠れたるに太子は獨り残り居て衣を脱て御前に進み出でければ帝は怪しみ汝は何とて逃げ去らぬぞと問たまふに太子は容を改ためて啓すやう、罪を二親に得ては天に階かけても昇るべからず、地に穴うがちても隠るべきにあらず、故に自から進んで笞を受け罪を謝せんのみ、と宣ひければ父の帝も妃も今更に太子の爲人尋常ならぬに感じ給ひ爾後は更に意を注ぎて育て給ふと。

太子五歳の頃父の帝より八經を授けられし中に殊に論語を好ませられければ一日父の帝問給ふやう、論語の中には何事が説てあるかと。太子答へて、唯仁の一字を説きてあり。父の帝、しかし論語は異國の書なれば我が神の道に違ふ事なき哉と訊へば太子は、東西道を異に爲ば一方は夫れ天外ならん哉と答へければ、父の帝愈々その聰慧なるを歡こび給ひ筆墨を授け書法を學ばしめ給ふに太子悦びて之を習ひ給ふ事日別に千餘字、三年の後王右軍の書を學びては其の骨髓に達せりと。

翌年太子六歳の冬十月、百濟國に遣はし、大別の王等歸り來りて經論及び律師、禪師、比丘尼等を將ゐて朝に献じたれば其を難波の大別王の寺に安置せられぬ。また此時に造佛工造寺工なども將來りて是より大和難波等に寺を建立するもの漸く加はりて太子は工藝誘導の端を啓いた。その翌年百濟國よりまた數百卷の經論を献じられた。太子は父の帝に請ひ天皇に奏して是らの經卷を緝き香を焼て之を誦し日毎に一二卷を閲し是より冬に至りて悉く讀了り給ふた。是に於て佛敎の説く所に從ひ帝に奏して毎

月八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日、六齋日と爲し此日は梵天帝釋が下界に降りて國勢を見をなはす日なれば仁慈の心を以て殺生を禁せられたしと乞はせられたれば帝は悦んで勅を天下に下して此の日に殺生を禁せられしと。

太子十歳の時蝦夷數千邊境に寇せしことがあつた。天皇群臣を召して征討の事を議し給ひける時、太子傍に座して耳を傾け給ひ、群臣の議するがやうにたゞ討伐を事とするも徒に人の命を滅すばかりである。それよりも先づ魁師を召し重く教諭を加へ重祿を賜ひて之を懷柔るに若かじと奏聞し給ひければ、天皇之を嘉して蝦夷の巨魁綾糟等を召し旨を諭し恩を加へたれば幸に事無きを得て其の後久しく邊境を侵さぬこととなつた。

十一歳の春の日太子は童子三十六人を率ゐて後園に遊び給ひ、左右に各二人を侍坐せしめ更に各々四人を侍立せしめ、而して殘る廿四人を兩分して庭前に對立せしめ各々一齊に聲を發して其所思を高らかに唱へさせられた。童子等悦び樂しみて或は戯

言を放ち或は眞實を吐くに、聲に長短あり高低あり、其を太子は明らかに聽分り給ひて毫も違ふ事がないので何れも感服せぬはなかつたと。

十二歳の秋七月百濟より日羅と云ふ偉人來朝した。非常な剛勇な方にて身より光を放つは火焰の如くであつた。一度び太子を見て其威神に驚き御前に跪づきて敬禮救世觀世音、傳燈東方粟散王と讚なされた。

太子十三歳の時秋九月に鹿深臣が百濟より彌勒の石像を持ちて歸り、父稻目の志を繼ぎ佛敎の信仰淺からざる大臣蘇我の馬子は其の佛像を請ひ受け、また人を遣はして諸國に佛道修行者を求めしめた。その使者が播磨國に至りし時、比丘に似たるものを見つけたして問へば答へて曰く、この地方は沙門を敬はぬに因て俗に混じて生活するのであると。それが高麗の名僧慧便が還俗してゐたのである。その由を大臣に報せしに迎へて師とせられ、夫より司馬達の女島と漢夜善の女豊、錦織壺の女石と言ふ三人を得度させ、島を善信尼と云ひ豊を禪藏尼と云ひ石を慧善尼と名つけた。馬子は厚

く三尼を崇ひ邸の東に佛殿を建立して彌勒の石像を安置し、三尼を屈請して齋會を設けた。是が我が國の尼僧と尼寺の始めである。吾國の佛教の法の門は婦女の身より開かれた。

また馬子は山居の石川宅に佛殿を造つて毎に到りて敬禮せられた。太子は幼にして既に佛法を信じ經にも通じ給ひければ、馬子が大臣にして佛法を奉ずるを見て深く之を讃め給ひ時々微行して馬子が造營せし佛殿に詣でて供養をしたまひ、且馬子にも佛法の功德を説き共に佛法を盛隆して世を救ふことを謀り給ふた。

太子十四歳の春、蘇我の大臣が大野嶽の北に塔を建て齋會を設けしに、司馬達は佛舍利を供養して夫を馬子に献じた。馬子は佛舍利の功德を感じて塔の中に納めて崇拜した。するとこの年に國中に疫病が流行して馬子も亦其病に感傳した。そこで天皇に奏して佛に祈らんことを願ふた。然るにこの敏達天皇は文史を愛して佛法を信じなさらぬのと又當時排佛家が多くありて物議紛々であつたので天皇は太子に對して我國は

元神を以て主として來りしに今大臣は異國の神を祭らうとするは如何であらうかと。
 太子は、諸佛世尊の教は其道微妙にして神も其意に違ふ筈はなければ差支なきのみで
 なく還て國家の爲に目出度ことに候と、奏上した。尙馬子は勅許を受けて石像を禮拜し
 て祈られたが疫病は益々諸國に蔓延して人民の死するもの甚だ多い。すると平常から
 蘇我家の反對なる、大連物部守屋は中臣勝海と共に天皇に奏し上た。先帝已來陛下に
 至るまで諸國に疫病息まず益々甚しきに至り民も絶盡きなんとす。是全く蘇我の臣
 等が異國の神なる佛像を拜みなどするので八百萬の神々の忿に觸れるのである。願は
 くは疾く詔して佛法を禁斷したまへと。天皇は速に勅許せられた。一方に太子は奏
 し上た。守屋勝海等は未だ因果の理を識らず禍福の道を辨へぬ故に濫に罪を佛法に歸
 するなり。善を修せば福至り惡を行へば禍來る。是自然の理にて佛の教である。何
 ぞ時到りて行はれんと爲る佛法を妨げんとするは却て禍を招くのであると。奏し上
 げたけれども守屋等は勅許を得たことなれば、かねての排佛の志を達するは此時に

こそと、暴力を以て堂塔を斫り倒し佛像を毀ち火を放ちてこれを焚き、焼き残れる佛像をば難波の堀江に棄て、加々その三尼を捕へて法衣を奪ひ杖を加へて之を辱かした。太子はこれを聞きしめし深く慨かせ玉ふた。馬子の大臣も餘りのことに歎き悲しみ守屋等を怨み憤つたけれども何共致し方がなかつた。守屋等が恚までに佛像を毀ち寺を焼等のことをなしたけれども疫病の息むべき様もなく却て流行は猖獗であつたすると世の老少等はこれを佛像を焼きし罪報なれと謂ひ合ふた。此時に天皇も守屋も同じく疫病に罹られたのである。馬子の大臣奏して曰く、臣が疫久しく癒されば願はくば三寶に祈らむと。天皇は既に太子の奏問を聞きしめし且つ疫病の甚しきを憂ひて大臣の奏請を許して、汝獨り之を爲せ他人を惑はす勿れと詔し玉ひて三尼の禁錮をも解きて、大臣に授けられた。馬子は歡び更に精舎を營みて三尼を供養せられ太子も之を賀して大臣の威を以て能く佛法に力を盡せば興隆の功必らず舉るべきことを讚美なされた。

太子の當時朝に在りて勢力を争つたのは蘇我と物部との兩家である。共に朝權を執てゐた。物部氏は遠く饒速日命から出て雄略の朝に大連となり、伊宮佛より後裔守屋に至り、蘇我氏は武内宿彌の裔で稻目より馬子に至り、稻目は宣化天皇の世に大臣となり、其女堅鹽媛は欽明帝の妃となり七人の皇子と六人の皇女とを擧げ用明天皇も敏達天皇も其子である。愆く蘇我氏は皇室の外戚と爲て非常に勢力があつた。

欽明帝の朝に百濟より佛像等を献じ表を以て佛德を讃嘆せしに欽明天皇いたく之を嘉して、朕未だ是の如きの妙法を聞かざりきと。日本に新たに佛敎の入來るや之を採り用すべきや否やは國家に取ての大問題である。之を群臣に諮ひ評議にかけた。すると稻目の大臣は謂ば開進主義にて、早くより外國の佛敎を聽き傳へてあれば崇敬の念を起して之を歡迎して是非御採用になるがよろしいと奏上したが、一方の物部の尾輿等は守舊主義にて未だ佛敎の何なるを知らず、ただ外來の異敎を嫌ふて切にかゝるものを御用ひになると、日本の神々の忿に觸るに依て御採用なさらぬ方か然りと論じた。

朝議が二派に分れたので、天皇も之を強て廣めよと宣はず佛像をば稻目の大臣に賜ひて汝獨これを禮拜せよと仰せられた。稻目は大に悦びて小墾田の家に佛像を安置し、向原の家を捨て、之を寺となした。そこで蘇我と物部兩家は、信佛家と排佛家にて開進と保守との二派に別れて軋轢甚しかつたが、稻目は欽明の三十一年に薨去し、尾輿も程なく卒した。敏達天皇の御代に大連は弓削の守屋にて、大臣は稻目の子馬子であつた。馬子は父の意を繼で佛法を信じ、守屋の方もまた父の志を受けて佛法を排斥した。恚れば將さに行はれんとする佛敎も政治家の朝權爭奪の道具に使はれるやうになつた。佛法の何たるを知らず黨派争ひの爲に妄りに排斥せんとするもあり、また一方には佛法は尊とときは信じても公に歸依の志を發表することの出來ぬ輩もあつた。

太子はかゝる時代に成長したまひ十四歳の時に敏達天皇崩御せらる。廣瀬の殯宮に於て馬子が太刀を佩き靈前に出で、誅詞を奉るを見て弓削の守屋は嘲けりて獵箭の

雀すずめに中あたつたやうな姿すがたであると言いふた。次に守屋もりやが進すすみて拜せせんとせしに手脚てあしがわな
くくと顛あへたから馬子うまこは之これを見て、鈴すずを懸かけたらよいと笑わらふた。最も謹嚴もつと きんげんであるべき
場所ばしよでさへ凭かく皮肉ひにくを言いひ合あふとは餘程よほど仲なかのよくない事ことが判わかる。また皇嗣こうすの選定せんていに就つ
ても皇后くわうごう炊屋媛すきやひめと馬子うまことは大兄皇子おほのいもうじを立てやうとし、物部ものべ大連おほはらじは穴穂部あなほべを立てやう
とした。が竟つひに馬子うまこの方が勝かちを占しめて翌年よくねん大兄皇子おほのいもうじが位くらみにお即つになつた。即すなはち用明帝ようめいてい
である。穴穂部あなほべ皇子べのわうじは無む法はふにも炊屋媛すきやひめ皇后くわうごうを奸かんせんと自らみづか殞宮ひんきうに入いらうとしたが先帝せんてい
の寵臣ちゆうしんであつた三輪みわの逆さかしは堅かたく宮門きうもんを鎖とぎして七度門たがもんを叩たけども入れなかつた。穴穂部あなほべ
皇子わうじ大いに怒いかり誅詞しゆじを奉たてまつつ
守屋もりやと共に兵へいを率ひきゐて池邊いけのほとの皇宮かうきうを圍かこんだ。逆さかしは之これを知しつて三諸みびろの山やまに隠かくれたが夜半やはん
潜ひそかに出いで、また皇后くわうごうの居をられる後宮こうきうに隠かくれた。その事ことを皇子わうじに告つげるものがあつたので
守屋もりやに命めいじて逆さかしを殺ころさしめ自らみづか後宮こうきうへ行ゆかうとしたれど馬子うまこの大おとど臣ぢが來きたつて諫いさめてゐ
る間あひだに守屋もりやははや逆さかしを殺ころして來きた。馬子うまこは歎たんじて天下てんか久ひさしからずして亂みだれんと言いひた

るに守屋は汝達小臣の知る所でないと言た。かく兩家の争ひは愈劇しきを加ふるに至つた。

太子十六歳の四月御父用明天皇磐余の河上に行へる新嘗から病を得て還らせられ痘瘡を御患なされた。太子は日夜に看護せられた。袈裟をかけ香爐を擎げて祈禱なされた。帝は群臣に勅して、朕は三寶に歸して病を祈らんと思ふ、卿等宜しく之を議れと宣ふた。時に物部と中臣とは詔に順はず議するやう、國神に背きて他神に敬を致すは不可であると奏した。馬子は之に反して勅なれば謹みて奉すべしと主張し、遂に豊國法師を引いて内裏に入れば太子は悦び大臣の手を握つて涙を垂れて語らるゝやう、佛敎の妙理人まだ之を識らずして妄に異説を樹て邪見に詔へる中に大臣は心を福田に歸して法師を請じて壽を祈らしむる事歡喜に耐えずと。大臣叩頭して曰く幸に殿下の聖德に頼り三寶を興隆することを得、死するも何ぞ悔いんと。此時も欽明の朝に同じやうな争であつたが蘇我家の勢力が前より加つてゐた爲と用明天皇も聖德太子も

これが姻戚であると同時に厚き作仰家であれば守屋も仕方がなかつた。かく太子と馬子とが悦んで語り合ふ姿を守屋が横目に睨んで大に怒つた。太子は左右に語り玉ふやう、大連は因果の理を識らず今にも亡びんとして少しも自から知らぬとは憐れむ可ものであると。

いよく事は破裂して守屋は退いて己が阿部の宅に往き兵を集めて戦争の準備をする。中臣勝海も夫に與みして戦備に取りかゝらうとしたがこれは太子の舍人迹見の赤檮に殺されてしまつた。その間に天皇は終に崩御したまひ太子は悲哀の涙に沈み玉ひしも喪を秘す違さへもなくして争亂は已に端を開いた。守屋は穴穂部皇子を立て、天皇となさんとした。馬子は炊屋媛後の詔を奉じ佐伯連等をして穴穂部皇子を殺さしめた。太子は止めて之は天倫に背く、人の人たる道でない。殺さすとも罪あらば他國に遷すがよいと諭されしも、大臣は聴かず、大義親を滅すとは斯る場合であると辯解した。太子はア、大臣まだ因果の理を知らずと歎息せられしと。七月朝議にて守屋征討

のことに決し、馬子は諸皇子群臣と共に兵を率ゐて討手に向ふて守屋の澁川の邸に迫つた。守屋はその子弟と共に手兵を率ゐて稻城を築きて妨戦した。守屋自から榎木に登り枝の間から矢を射ること雨の如くその軍なかく強勢なれば皇軍も恐怖して三度まで退却せり。其の時太子十六歳にて軍後に従ひ額に束髪して士卒を督し玉ひしが自ら思ひ玉ふやう、我軍或は敗れんとす、佛に祈るに非ずんば勝ち難からんと。乃ち秦の川勝に命じて白膠木を斫りて四天王の像を刻みこれを御頂きの髮中に置き誓ひ給ふやう、今我をして敵に勝たしめなば護世四天王の爲に寺を建つべし、と祈りて大に兵を進め遂に迹見の赤橋をして守屋を射させるに其矢守屋の胸に中りて樹から落ち川勝は進んで其頭を斬り其子弟等皆誅せられ大連の軍全く敗れて遂に平和と爲つた。太子は豫ての誓の如くに攝津玉造の岸上に四天王寺を建立なされた。また敬田院、施薬院、悲田院、療病院を建つ。敬田院は衆生恭敬渴仰すべき福田の寺にて、療病院とは男女無縁の病者を寄宿せしめ病に随つて薬療を興て看護せしめた。施薬院は藥物を

蒐め藥草の類を植ゑて藥を施しなされた。悲田院は貧窮な孤獨者を養ひなされた。また自ら眷顧し玉ひ、攝津河内の兩國に各々官稻三千束を出さしめて之を供給し玉ふた實に大慈悲の深きこと見つべきである。天王寺は始め玉造の岸上に建て、次に荒陵の東に移す。此處は昔釋迦如來轉法輪の所とす。寶塔の金堂は極樂の東門の中心に當り髻の髮六毛と佛舍利六粒を加へ塔の心柱の中に籠め納れ、六道を利する相を表はせり。寶塔の第一の露盤に誓ひて手づから金を縷ばめ遺法興滅の相を表せり。太子は慈悲深くしてまた國民にも慈悲の心を施すべき道を開きなされた。其當時我國未だ文明に到らず、漁獵を好み腥臭を喰ひ鳥獸の獵などを好む。太子は殺生の罪重きを知らせてまた藥獵を行はせられた。それは連立ちて野邊に出て良き藥草を多く取り得しものを勝として競ひ取り興味を感せしめるものである。凭く太子の仁慈の心は上下一般に及ぼしたが故に従來武骨一邊な殺伐の風も佛教の感化にて相互に和らぎ合ひ、禮儀を重んじ平和を樂しむやうに爲つた。